



龍の箱庭 第二卷

もんしろ蝶子

鈴は千尋の口から語られる龍の生態についてただただ目を丸くしていた。それと同時に、何かモヤモヤしたものが胸の中にしこりのように残る。

「鈴さんには簡単な龍の生態について書かれた本を差し上げましょう」

千尋の言葉に鈴は全く違う事を考えていたとは悟られないよう、大げさに驚いて見せた。

「いいのですか？」

「もちろんです。流星に言って送ってもらいましょうか」

「はい、是非！」

そう返事をしたものの、鈴が龍の生態を聞いた所で役に立つとは思えない。鈴と千尋は人間と龍なのだ。いくら千尋を愛しても、鈴は龍になることは出来ない。

そんな事を考えて思わず伏せてしまった視線を、千尋は見逃さなかった。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ……龍の生態の本は面白そうなのですが、やっぱり読むのは止めておこうと思います」
「どうして？」

「だって、それを読むと私と千尋さまが本当に違う生き物だと実感してしまいそうで怖いのです。長生きが出来たとしても、人間の寿命など知れています。私の寿命が尽きた後も、千尋さまはずっ

とずっと生きているのだと思うと、何だか凄く……寂しいです」

一体何をこんなにも寂しく思うのか自分でも上手く説明出来ないでいると、それを聞いて千尋がそつと鈴の手を引いて抱きしめてくれた。

「さつき結婚式が終わったばかりなのにもうそんな事を考えているのですか？ でも少しだけ鈴さんの気持ちの方が分かります。私達は種族が違い、寿命も違う。人の一生など、龍からすればほんの一瞬の出来事です。あなたが先に逝ってしまう事が既に確定しているというのは、言い知れない恐怖です。だから私は……」

そこまで言つて千尋は何かを飲み込むように口を嚥んだ。そして小さく息を吐いて話し出す。

「いえ、これはまだ言わないでおきましょう。鈴さん、時が来たら私は一つあなたにとっても重大なお願いをすると思います。その時は、どうかよく考えて返事をくださいね。私はあなたがどんな決断をしても、それに従うと誓います」

「重大なお願い……それは、龍神の花嫁になる事よりも重要な事ですか？」

「ええ。龍神の役目ではなく、私の一生を左右する事です。ですが、まだその時ではありません。あなたと私はもうしばらくこの地上で共に手を取り合つて役目を果たさなければなりません。それが終わった時に私からあなたにお伝えしますね」

いつもの笑顔ではなく、真剣な顔をした千尋に鈴はしっかりと頷いた。

千尋の人生を左右するようなお願いを鈴が叶えられるとは思わないが、千尋が鈴にそうしたいと言うのなら、しっかりと考えて答えを出そうと思う。

鈴は千尋の胸に寄りかかって目を閉じた。またうっかりそのまま眠りそうになるが、流石にこの流れでそれをするのは無防備すぎる。

名残惜しいとも思いながら千尋から体を離すと、鈴はじつと千尋を見上げた。

「なんですか？」

こちらを見下ろす優しい千尋の声に胸が小さな音を立てる。

「おやすみのキスを……してもいいですか？」

イギリスでは親愛のキスは日常茶飯事で、鈴もちろん両親におやすみとおはようのキスはしてもらっていた。

佐伯家に来てからはそんな事などしたことないが、結婚をした事で鈴にもようやく本当の家族が出来たのだと実感したかったのかもしれない。

そんな鈴の言葉に千尋は一瞬驚いたような顔をして、続いて苦笑いを浮かべた。

「キスというのは、口づけの事ですよね？」

「はい。あ、でも頬とかおでこにです」

「へえ？ 構いませんよ。では鈴さん、目を閉じてください」

鈴の言葉にどこか挑戦的な顔をした千尋は、そう言つて鈴の顔を両手で包み込んで鈴が目を閉じるのを待っている。

鈴は鈴で案外おやすみのキスに乗り気な千尋に驚きつつも、ゆっくりと目を閉じた。

次の瞬間、千尋が近づいてきた気配がしたかと思うと、そのすぐ後に唇に柔らかな感触を感じて驚いて鈴は目を開く。

「おやすみなさい、鈴さん」

「く、口!？」

「ええ。夫婦ですから。いけませんでしたか？」

にっこりと極上の笑みを浮かべた千尋に、鈴は思わず口をパクパクさせてしまう。

「い、いけなくない……です」

「イギリスでは挨拶代わりにするのですか？ 良い風習ですね。それだけで愛情を示すことが出来る。是非うちにも取り入れましょうか」

「あ、朝も口に!？」

「もちろん。あなたのご両親は頬やおでこにしていたのですか？」

そう言われて鈴は考え込んだ。言われてみれば千尋の言う通りだ。おでこや頬にキスをしてくれたのは鈴にだけで、両親はいっだってこっそりキスをしていた気がする。

「ふ、夫婦のキスというやつですね……」

「っふふ……す、すみません。そんな驚いた顔をしなくても！ 大丈夫ですか？ 私達はもう夫婦なのでしょ？」

「は、はい！ そうでした！」

忘れていた訳ではないが、鈴の中でおやすみとおはようのキスは頬かおでこだという先入観があったのだが、よくよく考えてみればそれは鈴が子どもだったからに過ぎないのだ。これではまるで自分から千尋にキスをねだったみたいではないか！

思わず顔を真っ赤にした鈴を見て千尋が声を出して笑うと、鈴の頭を撫でてくれる。

「冗談ですよ。手をつなぐのと一緒に、あなたがしたいと思ったらしてくれたらそれで」

「……千尋さまは優しすぎませんか……」

「そんな事を言うのはあなたぐらいですけどね。さあ、部屋まで送ります。今日は疲れたでしょうからゆっくり休んでください。そして明日は婚姻届を出しに行きましょう」

「はい！」

千尋の提案に鈴はすぐさま頷くと、ソファから立ち上がって千尋の手を取る。その左手の薬指にはお揃いの指輪がしっかりとはめられていた。

翌日、鈴はいつもよりも早く目を覚ました。昨夜の事を思い出す度に胸がドキドキしてよく眠れなかったのだ。

鈴は手早く着替えるといつもよりも早い時間から朝食の準備を始めだした。そこへ喜兵衛が眠そうな顔でやつてくる。

いつものように朝食の準備をして出かける準備をしているとあつという間に約束していた時間になっていた。

「鈴さん、そろそろ準備はいいですか？」

部屋にやってきたのは千尋だ。今までの千尋は先に車で待っていて鈴を部屋まで迎えに来る事など無かったというのに、今日はわざわざ迎えに来てくれたらしい。

「すみません、少し時間がかかってしまいました！」

「慌てなくてもいいですよ。時間はまだありますから。最悪受付が終わる前に行けばいいのです。」

昼食はどこかレストランに行ってみましょうか」

「え!? レ、レストラン!？」

千尋の提案に鈴が思わず慄くと、千尋は笑って頷いた。

「もしかしたら、鈴さんが懐かしいと感じる料理があるかもしれませんよ?」

「それはそうかもしれないませんが、私、テーブルマナーが不安なのですが」

「大丈夫ですよ。あなたは幼い頃からナイフとフォークに慣れ親しんでいるので、そこらへんの方よりもずっと扱うのが上手だと思います」

「そ、そうでしょうか?」

「ええ。さあ、行きましよう、鈴さん」

そう言つて手を差し出してきた千尋を見上げて、ふと鈴は言った。

「千尋さま、少しだけ目を閉じて屈んでももらえますか?」

「はい?」

鈴の言葉に何の抵抗もなく千尋が屈んで目を閉じた。そんな千尋を見て鈴はゴクリと息を呑むと、小さく深呼吸をして千尋の唇に軽くキスをする。

その途端、千尋は驚いたようにパチリと目を開けて鈴を凝視してきた。

「お、おはようのキスです。朝はし損ねてしまったので」

「そう……ですね。いえ、手を繋ぐのも躊躇っていたあなたからの口づけなど、本当に一生無いかもしれないと思っていました……」

「だ、だってキスは愛情を示す為のものだから……ちゃんと、伝わりましたか？」

恥ずかしさのあまり俯いてそんな事を言う鈴に千尋は口元を抑えながら頷く。そんな千尋を見て鈴はようやくホッとしたように笑顔を浮かべた。

「驚いた。何千年生きてきてこんなに驚いたのは初めてかもしれません……」

「そ、そんなにですか？」

「そんなにですよ！　だって、鈴さんですよ？　何か粗相をしそうだという理由で手すら繋いでくれなかった鈴さんが！」

「それはすみません。恥ずかしかったんです。だって、男性の方と手を繋いだ事なんて、本当に子ども時代以来だったので」

「それに関しては感謝していますよ、佐伯家に。もしもあなたが佐伯家で普通の生活を送っていたら、きっと今頃とうに誰かの元に嫁いでいたでしょうから。そういう意味ではあなたを大切に誰にも見せずに居てくれた佐伯家に感謝しています」

真顔でそんな事を言う千尋に鈴は思わず吹き出した。

「千尋さまってば！ 私がたとえ普通に暮らしていてもそんな事にはならなかったと思います。だって、この見た目ですから」

そう言つて鈴が自分を見下ろすと、千尋は顔を横に振る。

「あなたは知らないのです。自分がどれほど魅力的かを。確かに髪の色や目の色で避けられる事はあるでしょう。ですが、街を歩くと沢山の人があなたを振り返ります。だからね、鈴さん。今日はちゃんと私の隣を歩いてくださいね」

そう言つて千尋は鈴の手を取った。そんな千尋を見上げて鈴も手を握り返すと、千尋がようやく微笑む。その笑顔はどんなお菓子よりも甘かった。

「行つたかい？」

「うん」

二人が車に乗り込んだのを確認した楽は真顔で頷く。それを聞いて雅は鈴とお揃いの割烹着の袖

を捲り上げた。

「それじゃ始めるか」

「俺、氷屋行ってくる！」

楽の言葉に雅は財布を渡してきて言った。

「ああ、頼んだよ。それからついでに帰りに酒屋に寄って店で一番美味しい酒を買ってきてやってくれ。それから喜兵衛、料理は任せだよ」

「ええ。姉さんはお菓子、失敗しないよう頑張ってくださいね」

「ああ。ずっと鈴の隣で見てたからね！ パウンドケーキとゼリーは完璧だよ」

雅が胸を叩いて言うと、楽と喜兵衛が頼もしそうに頷く。

「それじゃあ行ってきます！」

そう言って楽は雅から預かった財布をしっかりと懐に仕舞って廊下を駆け出した。

今日は鈴の誕生日だ。今まで誰かの誕生日を祝うなどという事をしたことが無かったけれど、千尋の誕生日を祝った事で神森家の人々は認識を変えた。

神森家は山の中腹辺りにあるので物を買うに行くのには不便だけれど、最近はもっぱら楽と弥七が買い物係に任命されていた。

地上に下りてきてすぐの頃は千尋の境界のせいで屋敷の敷地外に出られなかった楽だが、皆が千尋にお願ひしてくれた事で今はもう楽も自由に出入りが出来るようになってゐる。

「皆待つてるから早く買い物済ませないと！」

独り言ちて山を下る楽の足取りは軽い。

都に居た時はこんな風に誰かの為に買い物に行くことなんて無かった。千尋も居なかったし、屋敷に勤めていた人たちも千尋が追放されたと同時に、まるで蜘蛛の子を散らすようにさっさと辞めてしまったからだ。

けれど今はそれで良かったと思つてゐる。初に利用されて地上に追放されてしまった楽だが、そのおかげで本当の千尋を知ることが出来たのだから。

何よりも今は毎日が楽しい。たった一人で屋敷を磨いていたあの頃とは違つて。

山を下りるとそこにはバス停がある。滅多に誰も使わないので、そのバス停はもはや神森家専用のバス停と言つても良かった。

そのバス停に、誰かが途方に暮れたように座り込んでるのが見えた。

「あれ？ お前」

楽は座り込んでいる人影に近づき思わず驚いて声をかける。そんな楽に驚いた様子もなく返事を

したのは堇だ。

「あんだ、こんな所で何やってんの」

「それはこっちの台詞だよ」

「別にあんたに関係ないでしょ？ それよりそっちは何やってんの？ まさか逃げ出してきたとかじゃないでしょうね？」

「人聞き悪い事言うなよ！ 今日はいいつの誕生日だからお祝いすんだよ！ で、俺は今からその為の買い出しに行くの！」

「そう言つて楽が拳を握りしめると、途端に堇の表情が和らいだ。

「鈴の誕生日？ そう言えば今日だっけ。神森家では誰かの誕生日を祝うの？」

「あまりにも表情を和らげた堇を見て楽は驚きつつ頷くと、堇はまるで自分の事のように嬉しそうに頷く。

「そうなの。良い習慣ね。それじゃあ私は帰った方がいいかも。あんだがたまたま通りがかつてくれて良かったわ。これ、鈴に渡しておいてくれない？」

「そう言つて堇が取り出したのは紙袋だ。それを見て楽が首を傾げると、堇は肩を竦めて言う。

「鈴の薬よ。昨日渡さないとって思いながらすっかり忘れちゃつたの。そろそろ無くなる頃だろ

うし、あんたんとこの当主ならもつと良いの買えるんだろうけど」

「薬？ あいつ、どっか悪いの？」

「なによ、あんた知らないの？ ああ、そっか。心配かけたくないのね。でももう家族なんだからそういうのは良くないわ。鈴ね、小さい頃大きな事故してその後遺症で今も定期的にその時の傷が痛むのよ」

「……後遺症……？」

楽はそれを聞いて思わず葦の隣に腰掛けた。楽だけが知らなかったという事実よりも、鈴が昔大きな事故に遭ったという方が気になったのだ。

「そうよ。あんたもうちであの人達の話聞いたでしょ？ 久子と蘭は鈴を殺そうとしてる。一回目は事故にみせかけて。二回目はこの間。薬って偽ってトリカブトを蘭の名前で送り付けて飲ませたの。それでもあの子は佐伯家を疑わない。特に蘭の事は本当に誇りに思ってるみたいだから、この話はある子には秘密にしておいてちょうだい」

「ト、トリカブト!? それじゃあもしかして千尋さまが里帰りから戻った理由って……」

そこまで聞いてようやく楽は、何故千尋が里帰りを二週間も早く切り上げて地上に戻ったのかを知った。

確かに楽もあの時その話を聞いていたが、具体的に何があったのかは全く知らなかったのだ。

「そんな……あの時佐伯家で聞いた話って……」

まさかそこまで重大な事件だったとは知らず、楽は青ざめて鈴を責めた自分を恥じた。知らなかったから仕方ないでは済まされない。

思わず視線を伏せた楽に、何を勘違いしたのか董が言った。

「私達は鈴をあの家から鈴を出すために神森家を利用したのよ。でも……今はそれで良かったって思ってる。だって、昨日の鈴は凄く綺麗で嬉しそうだったから」

そう言って涙を滲ませた董を見て楽は息を呑む。鈴を思っってこんな顔をするのか。そう言えば鈴も董の話をする時はいつもこんな顔をする。

「お前たちって本当の姉妹みたいだな」

「なによ急に。まあ、正しくは従姉妹なんだけど。でもそうね。私は鈴を妹みたいに思ってるわ。随分長い間伝えられなくて大変だったけど。さあ、おしゃべりはこれでお終いよ！ はい、これ、ちゃんと渡してね」

そう言っって立ち上がろうとした董の手を、気づけば楽は掴んでいた。

「ちよっと待てよ！ せっかくここまで来たんだから、お前も参加していけよ」

「何の連絡もせずに来てそんな事出来る訳ないでしょ？」

「そういうの千尋さまは気にしねえよ。ていうか、誰も気にしねえよ。お前がいたら、あいつも喜ぶ」

「それは……どうかしら。私は口うるさいから誕生日にまで嫌味を言われるのは流石に鈴が可哀相でしょ」

「お前の嫌味なんてあいつに効いてる訳ないだろ。お前が何話したってニコニコしてんだから。それに、妹の誕生日を祝ってやるのも姉の務めなんじゃないのか？」

樂の言葉に、堇は苦虫を潰したような顔をして言う。

「……こんな事になるなら、もつとちゃんとした格好してくれば良かったわ」

「別に可愛いからいいじゃん、それで」

何気なく樂が言うと、途端に堇は顔を真っ赤にして立ち上がって叫んだ。

「お、お世辞はいらないのよ！ それよりもあんた、買い物行くんでしょ！ さっさと行くわよ！ 日が暮れたらどうするのよ！」

「あ！ おい、待ってって！」

それだけ言ってバス停とは反対方向にある町の方へ向かって歩いていく堇の耳は、樂が見ても判

るぐらい真つ赤だった。

鈴と千尋が街に到着すると、弥七は心配そうに鈴に地図を渡してきた。

「本当に大丈夫かよ？ やっぱり俺が案内しようか？」

興味津々と言った様子で地図を見つめる鈴を見て弥七が言うので、鈴は顔を上げて笑顔を浮かべる。

「大丈夫ですよ！ 千尋さまも居ますし、私も既に何度か街に来ているので！」

「そうですよ、弥七。迷ったら最悪駐在所にでも駆け込めば何とかしてくれますよ」

「いや、駐在所に神森家の当主が迷子になったって駆け込んだら、何十年も笑われるだろうからそれだけは避けてほしいんですけど……」

にこやかにそんな事を言う千尋を見て弥七が真顔で言うのと、千尋はおもむろに鈴が持っている地図を覗き込んで頷く。

「本当に大丈夫ですよ。役所までの道は覚ええました」

「え!? 今の一瞬で覚えたのですか!？」

千尋の言葉に鈴が目を丸くすると、千尋は笑顔で言う。

「ええ。仕事でこういう書類やら地図を覚えなければならぬ事が沢山あったので慣れてはいますよ。要は曲がり角を間違えなければ良い話です。さあ、行きましよう鈴さん。それでは弥七、後は頼みましたよ」

そう言つて千尋は鈴の背中を軽く押すと、振り返つて弥七に言った。それを聞いて、弥七が深々と頭を下げる。

「それじゃあ16時頃にまたここへ迎えに来ます。お氣をつけて」

「ええ、ありがとうございます」

「弥七さん、ありがとうございます！」

「ああ。お前も氣をつけてな。千尋さまから離れるんじゃねえぞ？」

「はい！」

鈴はそう言つて何気なくいつもの調子で千尋の袖を掴むと、千尋と弥七はそんな鈴に苦笑いを浮かべる。

車に乗り込んでその場を後にした弥七を二人で見送つていざ歩き出そうとすると、ふと千尋が少

しだけ屈んで鈴に言った。

「どうせなら手を繋いで歩きますか？」

「ええ!? ま、街中ですか？」

「ええ。そうすればはぐれないでしょう？」

そう言つて千尋はそつと鈴の手を取る。

鈴は驚いて周りを見渡してみたが、どこを見ても手を繋いでいる男女などおらず、それどころか女性は男性の後をついて歩いている。そんな中で鈴と千尋は異様に目立つよううで、先程から周りの視線が痛い。

「さ、流石に目立ちすぎでは……」

「そうでしょうか？ 私は誰に何と思われても気にしません」

「流石です！ でも……私はやっぱりそこまでの自信はないです……」

視線を伏せてそんな事を言う鈴に千尋は怒りやしないかと思つたが、鈴の予想に反して千尋から笑い声が聞こえてくる。

「冗談です。でもせめて隣を歩いてくださいいね」

「は、はい！」

それぐらいなら出来そうだ。鈴は笑顔を浮かべて頷くと、ようやく歩き出した。

どれぐらい通りを歩いただろうか。千尋は地図を覚えたというだけあって、その足取りに一切の迷いが無い。

一方鈴は、万が一迷子になってしまった時の事を考えて道順を覚えるのに必死だった。

「角が呉服屋さんで、向かいにあの文具屋さんで……あれは何屋さんだろう？」

「あれは質屋ですよ。鈴さんは偉いですね。ちゃんと道を覚えようとしているのですか？」

「ブツブツと独り言を言いながら歩く鈴に千尋が声をかけてくる。

「偉くなんて……あ！ 千尋さま、あれは何屋さんですか？」

「あれは何でしょうね……あ、カフェーのようです。鈴さんには縁のない場所ですよ」

「そうなのですか？ カフェーはお茶を飲む所ですよね？」

「そうなのですが、カフェーではお酒も取り扱っているのです。なので、どちらかと言うと少し大人向けのお店ですね」

「なるほど……では千尋さまもカフェーに行ってみたりしたいですか？」

千尋はお酒が大好きだ。水龍というだけあって際限なく飲むと雅が嘆いていたが、だとすれば千尋はカフェーに寄ったりしたいのではないのだろうか。

何気なく鈴が言うと、千尋は苦笑いを浮かべて首を振った。

「いえ、私のお酒は家で飲むのが好きなので、あまりああいっただ店で飲みたいとは思いません。鈴さんがいつか飲めるようになったら、是非二人で飲みましょうね」

「二人で？」

「ええ、二人で。きっと楽しいと思います」

そう言って千尋は目を細めて鈴を見下ろしてくる。何だかその顔は本当に待ち遠しそうで思わず鈴は笑顔を返してしまう。

「はい！ 練習に付き合ってくださいますか？」

「もちろんです。さあ、到着しましたよ」

「いつの間に!? 千尋さまと居ると楽しくてあつという間に時間が過ぎてしまいます」

気がつけば他愛もない話をしている間に役所の前まで来ていた事に鈴は全く気づかなかつた。そんな鈴に千尋は笑って頷く。

「それは私事です。あなたと居ると本当に時間などあつという間に通り過ぎていくようですよ。それが少しだけ恐ろしいですね」

そんな事を言う千尋に鈴は思わず表情を曇らせてしまう。そんな鈴を見て千尋は慌てたように付

け加えた。

「ですが、そんな人と巡り会えたのは素晴らしい事だと思うのです。すみません、失言でした。そういうつもりで言ったのではないですよ」

「大丈夫、分かっています。私も全く同じことを考えていたので」

千尋を見上げて鈴が微笑むと、千尋はホッとしたように笑顔で頷く。

「さあ、それでは婚姻届を出しに行きましょう」

役所の前で千尋が鈴に手を差し伸べてきた。鈴はその手をためらうことなく掴む。

これで鈴は亡くなった両親でも佐伯でも的場でもない、神森の人間になる。何だかその事に胸が締め付けられたけれど、それとは裏腹にどこか幸せなような、嬉しいような相反する気持ちが芽生える。

鈴は階段の下から千尋を見上げた。千尋は小首を傾げて笑みを浮かべこちらを見下ろしていて、そんな千尋を見て鈴の中で何かが音を立てる。

「私は、これからずっと千尋さまの側に居る事が出来るのですね」

ポツリと呟いた鈴に千尋は一瞬キョトンとした顔をしたけれど、鈴の手を引つ張って半ば強引に階段を上らせて隣に鈴を立たせた。

「そうですよ。あなたはもう私の花嫁です。そして私の心もまた、あなたの物です。互いの命が尽きるその日までずっと」

静かな千尋の声に鈴はコクリと頷いて目尻を拭った。その一言がこれからの不安を一蹴してくれたような気がする。

「はい」

静かに返事をした鈴を見て千尋は心底嬉しそうに微笑んで、手を繋いだまま二人で役所に入った。

役所という所は何だかとてもバタバタしているのだな。鈴が真つ先に抱いた感想はそんな事だった。建物の中では誰も彼もが忙しそうに歩き回っている。

そんな中、奥から一人の年配の男性が姿を現した。その男性を見るなり、それまで忙しそうにしていた人たちの顔に緊張の色が浮かぶ。きつと偉い人なのだろう。

男性は厳しい顔をしてこちらに近寄ってくると、まずは千尋を見て息を呑み、続いて鈴を見て相好を崩した。

「ご連絡ありがとうございます。お待ちしておりました。この度はご成婚おめでとうございます」

「ええ、ありがとうございます。あなたはどうぞやら随分と昇進したようですね、内田さん」

男性の事を知っているのか、千尋はいつものように笑みを浮かべて言う。男性は恥ずかしそうに頭をかいて頷いた。

「はい、あれからもう何十年。あの時は本当に失礼いたしました」

「構いません。あなたは当時まだ新人で、私達の事など知りもしなかった。何よりも私は威勢の良いやあなたを買っていました。そしてその勘はどうやら当たっていたようです」

そう言って嬉しそうに微笑んだ千尋を見て内田もまた嬉しそうに微笑む。それはとても不思議な光景だった。見た目の年齢は随分と離れて見えるというのに、何だかこの二人の関係はまるであべこべだ。

当時この二人の間に何があったのか不思議に思いつつも口を挟んではいけないと理解していた。鈴が黙って二人の話を聞いていると、ふとそんな鈴に気づいたかのように内田が鈴を見下ろしてきた。

「ようやく花嫁が決まったとお伺いした時は一体どんな方を連れて来られるのかと楽しみにしていました。やはりあなたは私なんかの予想を遥かに上回ってくるようです！」

「おや、そうですか？ 一体どんな方を想像していたのです？」

不敵に笑った千尋を見て内田は慌てたように首を振って、もう一度鈴を見て微笑んだ。途端にさ

つきまでの厳しい雰囲気が消えて、人当たりの良さそうな表情になる。

「まさかこんなにも可愛らしい方を連れて来られるとは思いませんでした。奥様は混血なのですか？」

「はい。父がイギリス人なのです。名前は鈴と申します。今後ともよろしくお願いいたします」

きつとこの人は千尋と親しい人なのだろうと判断した鈴は内田に向かって頭を下げた。そんな鈴を見て内田はさらに目を細める。

「そうでしたか。私は内田と申します。こちらこそよろしくお願いいたします。皆、あなたのお披露目を今から楽しみにしていますよ」

内田の言葉に鈴がキョトンとする隣で、何故か千尋は苦い顔をしている。

「あまりお披露目したくないのですけどね」

「そうはいかんでしょ！ 皆がどれほどあなたの婚礼をお待ちしていたか！ 今からこの可愛らしい花嫁の姿に皆が驚く様子が見て取れるようですよ！」

「そうですね。今から気が重いですよ」

「皆、自分の代で見ることが出来るかどうかだったのです。そう言わんでやってください」

本気で嫌そうな顔をする千尋に今度は男性が困ったように笑った。そんな内田を見て千尋もよう

やく納得したように頷いてチラリと視線をカウンターの中に移す。

「それで、今は婚姻の作法はどうすれば良いのですか？」

「書面に書き込むだけです。昨今はお試し期間などと称してすぐに婚姻届を出さない方々も居ますが、本当によろしいのですか？」

何かを確認するように内田が千尋に問いかけると、千尋は笑顔で頷いた。そんな千尋を見て内田も嬉しそうに微笑む。

「そうですか。では少々お待ち下さい」

そう言つて内田はカウンターに座っていた若い男性に耳打ちをしたのだが、若い男性が厳しい顔をして小声で内田に話し出した。

「——で——佐伯——ええ、連絡が——神森——」

鈴には若い男性が何を話しているのか聞き取れなかったのだが、若い男性の話を聞いていた内田の顔は見る見る真っ赤に染まっていく。

けれど若い男性はそれでもひるまずに、横目で鈴を睨みながら早口で内田に意見していた。

「もしかして、佐伯という家から何か連絡がありましたか？」

いつまで経つても進まない手続きに業を煮やしたかのように千尋が澄んだ声で言うと、その途端、

役所の中が静まり返った。

内田はハツとして若い男性から半ば無理やり奪い取ってきた書類を持ってこちらに駆け寄ってくる、千尋に手渡す。

「いえ！ お待たせしてしまい申し訳ありません！ こちらに記入をお願いします！」

「ええ」

鈴はそんな状態に一人ハラハラしていたのだが、千尋はいつも通り涼やかな顔をしてペンを手に取る。それを見て今度は若い男性が立ち上がった。

「内田さん！ 俺は佐伯家にこの婚姻を止めるよう言いつけられているのです！ その女性はどうでもない方なんですよ！」

「お前の故郷の佐伯家とやらがどんな豪商かは知らんが、神森様の決定に逆らうような事があつてはならないんだ！ おまけに奥様をとんでもない方だなどと——」

「はは、懐かしい言葉ですね。まるで彼はあの時のあなただ。まあ、内容は随分違いますが」

熟れた林檎のように顔を真っ赤にして叫ぶ内田の言葉を制して千尋が笑うと、内田は途端に恥ずかしそうに頭をかく。

「そ、それはもう言わんでください」

「すみません。ところでそのあなた。佐伯家に何を言われてどんな弱みを握られているのかは知りませんが、この世界の誰であつても私の決定を覆す事は出来ません。それが神森家なのですよ。まだ当分この国で生活をしたいのであれば、それをよく覚えておいてくださいね」

口調は柔らかいし笑顔だというのに何だか背筋がひんやりするような千尋の声に鈴はゴクリと息を呑んだ。若い男性も口をポカンと開けたままその場で固まってしまっている。

けれど、そんな千尋でさえ見ることが出来て良かったと思ってしまう鈴はもしかしたら自分で思っている以上に千尋の事を慕っているのかもしれない。

そんな鈴を横目に千尋はさらさらと書面にペンを走らせた。

「鈴さん、あなたの名前もここをお願いします」

「あ、はい」

鈴は言われるがまま書面にサインをすると、続きを千尋が書き込んでいく。こんな時でも少しも動揺しない千尋を見て、鈴は改めて尊敬の眼差しを向けてしまう。

ひと悶着あつたもののどうにか無事に役所での手続きが済むと、途端に千尋は晴れやかな顔をして言った。

「それでは後はよろしくお願いしますね、内田さん」

「はい。私が自ら手続きをしておきます。神森様、ご成婚おめでとうございます」

「ありがとうございます。さあ鈴さん、これで私達は晴れて夫婦となりました。お祝いにこのままレストランに向かいましょう」

「は、はい」

流星が以前言っていた怖い千尋を思いがけず垣間見てしまった鈴が頷きながらおずおずと千尋に手を伸ばすと、千尋はすぐさま嬉しそうに鈴の手を取る。

「これは珍しい。では行きましょうか」

「はい！」

さっきの貼り付けたような冷たい笑顔が鈴と手を繋いだ途端に和らいだ事に気づいて、ようやく鈴も微笑む事が出来た。

「すみません、鈴さん。せっかくの雰囲気上台無しにしてしまいましたね」

役所を出てしばらくすると、突然千尋がそんな事を言い出した。

あまりにも突然すぎて意味が分からず鈴がキョトンとして千尋を見上げると、千尋が苦笑いを浮かべて言う。

「ついうっかり都で仕事をしていた時の事を思い出してしまいました。佐伯家がこんな所にまで根回しをしていたのかと思うと、少し腹が立ってしまったようです」

申し訳無さそうにそんな事を言う千尋に、鈴は笑顔で首を振った。

「では私は佐伯家に感謝をしなければいけませんね」

「感謝？」

「はい！ 貴重な千尋さまのお仕事モードを見る事が出来たので」

鈴がそう言って微笑むと、千尋は困ったように笑って言う。

「あまりお見せしたくは無かったのですが」

「そうなのですか？ お仕事モードの千尋さまはやっぱり格好良いなって思いましたよ？」

「……そんな事を言うのは流石に世界広しと言えど、鈴さんだけです」

「皆さん、勿体ないですね」

何故か照れたようにそっぽを向いてそんな事を言う千尋に思わず鈴が言うと、千尋はそれ以上は何も言わずに握った手に力を込めてきたのだった。

鈴と千尋が楽しくレストランで昼食をとっていた頃、神森家はまるで戦場のようだった。

「董！ あんたは本当に不器用だな！ こっちはいいから樂を手伝ってきてくれ！」

雅がそう言つて台所から不器用過ぎる董を追い出そうとしてくる。そんな雅に董は頬を膨らませながら抗議した。

「どうせ私は不器用よ！ 女学園でも家事は優を貰えないけど、学科では全部優なんだからね！」

「へえ、学科はいいのか。まあ董はそっちのが向いてるかもね。いいじゃないか。新しい時代の女は賢く強くないとな！」

「そ、そんな事は初めて言われたわ」

思いがけない雅の言葉に今度は董は頬を染めてモゴモゴと言う。

勇もマチも董が家事が出来ない事を責めはしないが、学科で優を取つてもさほど褒めてもくれない。やはり心のどこかで女は家にはいるべきだという思いがあるのだろう。

「そうかい？ 千尋も言つてたよ。あんたは勉学の方面に才能を伸ばした方がいいのにつて。あたしもそう思うよ」

「そ、そうなんだ。ま、まあ、一応お礼言つとくわ。ありがとう」

「素直に喜びやいいのに。あ、そうだ！ 樂の手伝いに行く前にあんたに一つお願いがあるんだ。鈴のせつかくの誕生日だ。どうせならあの子が一番好きな物を食べさせてやりたいから、あんたの歪んだおにぎりと殻入りの卵焼き作ってやってくれないかい？」

そんな事を言つて意地悪な笑みを浮かべた雅を董はキツと睨んで早速取り掛かる。鈴にこのおにぎりとお焼きを作つてやるのはもう随分久しぶりのような気がして、何だか鼻の奥がツンとした。「あーあー、これは俵かい？ それとも三角？」

「どう見ても三角でしょ！」

「あ、それ今殻が……そ、そんな測りもせずに醤油入れて……ああ、そのまま焼くんですか!？」
「うるさいわね！ うちではこうなの！」

鈴の為におにぎりとお焼きを作る董だが、さつきから雅と喜兵衛がうるさい。鈴は毎日こんな風にここで皆の食事を作っているのだろうか。

佐伯家ではたった一人で毎日欠かすこと無く食事の準備をしていた鈴だったが、あの時の鈴は一体何を考えながら皆の食事を作っていたのだろうか。

「あの子、今きつと凄く幸せなんでしょうね……」

卵焼きをどうにかこうにかまとめながら董が言うのと、雅と喜兵衛は顔を見合わせている。

「そうだと嬉しいね。でも鈴はどこへ行っても些細な幸せを喜べる子だろ？」

「そうだけどその割合の問題よ。佐伯家に居た時のあの子はほとんど笑わなかったもの。でもここに居るあの子はずっと笑ってる。凄く自由よ。小さい頃の鈴みたい」

堇の後を「堇ちゃん堇ちゃん」と言つてずっとついて回つていた西洋人形のような可愛らしい少女は、いつからか笑いも泣きもしなくなつてしまった。特に事故の後には本当に悲惨で、口すら利かなくなつてしまつた時期もあったほどだ。それでも鈴は8年間もの間、ずっと佐伯家に尽くした。そんな鈴に耐えられなくて何度も何度も堇は勇と衝突した。早くここから出よう、もうこれ以上鈴にこんな態度は取れない。何度もそう言つたが、勇は決して頷かなかつた。

「今思えば父様は分かつてたのよね。鈴を連れて佐伯家を出ても結局佐伯家は鈴を狙うだろうって。完全に佐伯家を取り壊してしまわない限り、鈴は狙われ続ける。だから父様もずっと我慢していたのよね。私は何も知らないで父様を責めてしまつた。酷い娘だわ」

「それは違ふだろ！」

おにぎりを握りながら話す堇の話を一体いつから聞いていたのか、そんな風に否定してきたのは楽だった。

堇が驚いて入り口を見ると、眉を釣り上げた楽がツカツカと入ってくる。

「あんた、台所は女の聖域よ。男子が入るなんて——」

「そんなおにぎりとお卵焼きしか作れねえやつに言われたかねえよ」

「なんですって!?!」

「俺が言いたいのはそんな事じゃなくて！ お前は誰よりも良い姉だつて言いたかつたんだよ！ 親父さんからしてもそうだ。お前は最高の娘に決まつてる！」

「な、何を急に——」

「お前が、お前らがあんまりにも献身的すぎるから言つてんだ。お前もあいつもそっくりだよ。誰かに尽くす事ばつか考えて、自分の事は全部後回しだ。そういうのは見てて腹立つんだよ！ ちよつとは自分たちの幸せにも目を向けるよ！ お前らの人生だろ！ 誰かの為に使うな！ 自分の為に使えよ！」

「そ、そんな事……」

初めて言われた。董はそんな言葉を飲み込んでじつと楽を見つめた。そんな董にバツが悪かったのか、楽は視線を反らして何故かおもむろに今作つたばかりのおにぎりをおにぎりを董の許可も取らずに食べる。

「ちよつと！」

「あ、なんだ味は美味いじゃん」

「そうなのかい？」

「うん。塩加減ちょうどいいよ」

「どれどれ。あれ、ほんとだ。それじゃあもしかしてこっちの卵焼きも？」

そんな事を言いながら今度は雅がせっかくどうにか巻くことが出来た卵焼きに箸を入れた。

「ちよ、ちよっと！ どうしてあんた達が食べるのよ！」

「こりや驚いた！ ちよっと喜兵衛、楽、食べてみな！ 味はいいから」

「……本当ですね。あ、でも殻が……」

「ん、美味しい。でも殻が……」

「悪かったわね！ 歯ごたえあっていいでしょ!? 卵の殻にはカルシウムが一杯なのよ！」

気がつけばせっかく作ったおにぎりも卵焼きも綺麗に無くなってしまっている。菫は空になってしまったお皿を見て思わず怒鳴ったのだが、そんな菫に楽は苦笑いを浮かべて言う。

「歯ごたえって。卵焼きに歯ごたえなんか誰も求めてないだろ。あいつがお前の料理を絶賛してた理由が分かった。ついでにあいつの料理が美味しいのも分かったよ」

「どういう意味？」

「だってあいつに料理のアドバイスしてたのお前だろ？　自分で作れなくても味覚は鋭いからあれこれ指示出来たんだろ」

「それはそうかもね。鈴はいつつも言うもんな。董ちゃんはいつも文句言いながら全部食べてくれるって。美味しい時も文句言うけど、おかわりをするんだって」

それを聞いて董は耳まで赤くして、楽は呆れたように董を見ている。

「素直じゃねえなあ、お前」

「いや、今話を聞く限り董さんは誰よりも素直なのでは？」

「確かに」

喜兵衛の言葉に雅が納得したかのように頷いて空になった皿を洗い始めた。

「そんな訳だから董、悪いけどもう一回作り直しだよ。いや〜見た目に反して味は良かった！」

「本当ですよ。出汁も醤油も目分量でどんどん入れるからヒヤつとしましたが、意外や意外でしたね〜」

「この感じだと他のも食べてみたくなるな……お前、今度なんか作ってこいよ」

「嫌よ！　何で私があんたに作らなきゃいけないのよ！　ていうか、どうして全部食べちゃうのよ！」

もしかしたら今までで一番良い出来だったかもしれないおにぎりも卵焼きも、全部無くなってしまう。もしかしたらもう二度とあんなにも綺麗な三角のおにぎりと卵焼きは作れないかもしれない。

思わず涙を浮かべた董を見て三人は申し訳なさそうだ。

「ごめんごめん！ それだけ美味しかったんだよ。しかしあんたんとこの先生は見る目無いね。味はこんなに良いのに優をくれないなんて」

「いや姉さん、自分でもこの見た目では優はあげられませんよ、流石に。だから先生は惜しいと思っっているとしますよ」

「俺もそう思う。後は形さえなんとかなればなあって思っただけじゃないか？」

「そ、そう？」

「うん。あと殻な」

「……難しいのよ、卵割るの。はあ……このまま行ったら、私絶対に卒業面だって馬鹿にされるわ……」

さっきはカルシウムがーなんて言って誤魔化したけど、そりゃ董だって卵焼きに殻など入れたくて入れている訳ではない。

「なんだよ、卒業面って」

「悪口よ。在学中に結婚出来ずに中退しないでそのまま行き遅れて卒業する子たちの事をそう呼ぶの」

まあそう呼ばれるのは専ら容姿の良し悪しが大きい訳だが、家事が出来ないのも間違はなく結婚には向いていないとみなされる。そんな時代だ。

大きなため息をついた董に楽は首を傾げて不思議そうな顔をする。

「そんな事言われんの？ 卒業出来る方が凄じやん」

「ところがそうじゃないのよ、学園は。特に私の行ってる所はね」

「ふうん。それじゃあお前がもし結婚出来ずに卒業する羽目になったら、俺が学園に迎えに行つてやるよ」

「なんでよ」

「馬鹿にしてきた連中に言つてやれ。私の婚約者は私が卒業するまで待つていてくれたのよって」
シレっと簡単にそんな事を言つてのけた楽に董は自分の顔が真っ赤になるのが分かった。

「へえ、千尋よりも楽の方がずっと気の利いた事言うんだね」

「自分も驚きました！ 楽、そういうのはどこで学んだんだ？」

「ど、どこでって、いや、別に思った事言っただけで……」

しどろもどろにそんな事を言う楽を董は恥ずかしさのあまりキツと睨みつけた。

「か、からかわないでちょうだい！　もう！」

「からかってなんかないってば！」

顔を真赤にした董を見てようやく楽は自分が何を口走ったかを気付いたのか、耳まで赤くしてそつぽを向いてしまう。

けれど、董の心は楽の今の言葉でほんの少しだけ救われたような気がしていた。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関係ありません

当書籍内の文章・画像等の内容の無断転載及び複製等の行為はご遠慮ください。

龍の箱庭 第二巻

著者 もんしろ蝶子

発行日 2024年7月15日